

# 阿岐のまほろば

Vol. 10

## 戦国時代の福成寺を見た！

ふくじょうじきゅうけいだい 福成寺旧境内遺跡（西条町下三永）  
しちみなが

福成寺旧境内遺跡は西条町下三永に所在し、市道の改良事業に伴って、平成9年5月から6月まで発掘調査を実施しました。

調査はA・B2つの調査区に分けて行いました。その結果、A区からは石垣が、B区からは建物跡が見つかりました。B区の建物跡は一際大きな石を中心にして、<sup>こぶし</sup>拳大から<sup>じんとう</sup>人頭大の石を敷き詰めて作られており、その規模・位置から、かなり立派な建造物が想像できます。

文献史料によると福成寺は、16世紀頃に31宇の諸堂と42坊があったようです。『藝藩通志』の絵図によれば「中ノ坊跡」や「正善坊跡」などの名前が確認できますが、発掘調査を実施したA区がある水田には、「トウデンボウマチ」という地名が残っています。絵図の中に「等善坊跡」という名前がありますが、「トウデンボウマチ」と「等善坊跡」は、読みが似ていることから、A区の石垣は等善坊の一部であったとも考えられます。

B区は、立地条件や仁王門のすぐ横に位置することなどから『藝藩通志』の絵図に見られる「大坊」であった可能性があります。大坊とは通常、本寺の住職が住んでいる住居的な建物のことを言います。今回の調査で見つかった建物跡も、住職が住んでいたのかもしれませんが、また、大坊ではないとしても、数多くある坊の中でも最も有力なもののひとつと考えられます。

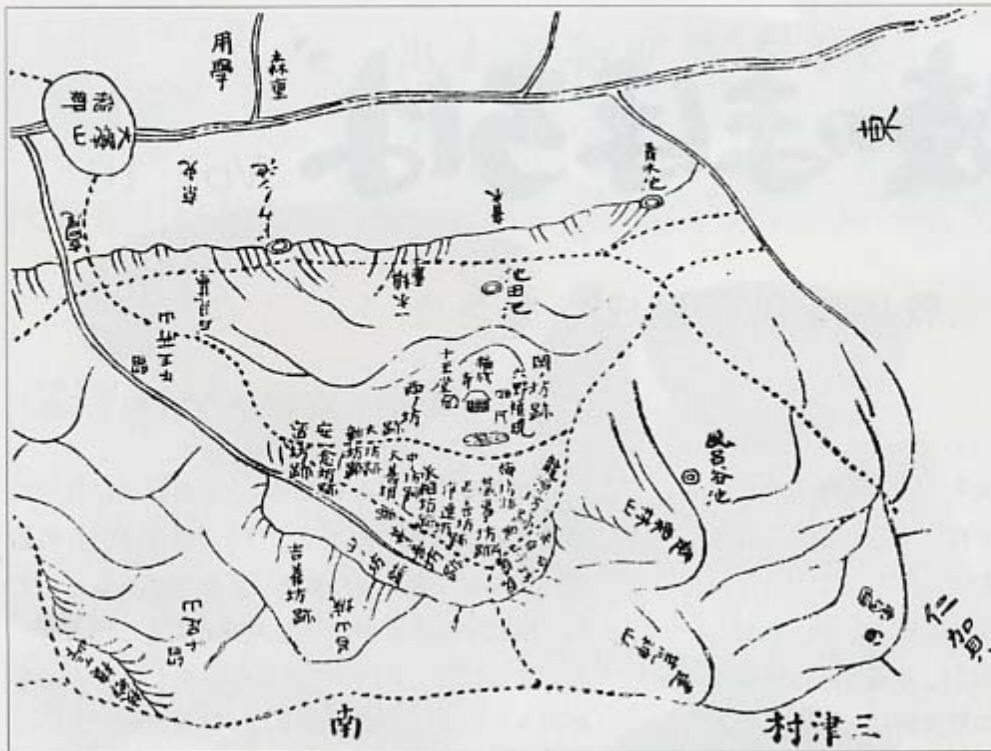


B区の建物跡



福成寺旧境内遺跡位置図（1:50,000）





『藝藩通志』より一部抜粋

## ことば

- 坊 ①区画された街。  
 ②都城制の一区画。  
 ③僧侶の住居。転じて僧侶。「一主」「僧一」  
 ④本寺に付属する子院。

この場合は③④と考えられるが、本堂と住居を兼ねていたであろう。また、ある程度の独立性・自主性を持っていたと考えられる。

発掘調査では、海外から運ばれてきた青磁の碗・大皿、茶の湯に使った天目茶碗や壺・風炉・火鉢、座敷に飾られた香炉の他、備前の甕や土師質土器などの遺物が多量に出土しています。

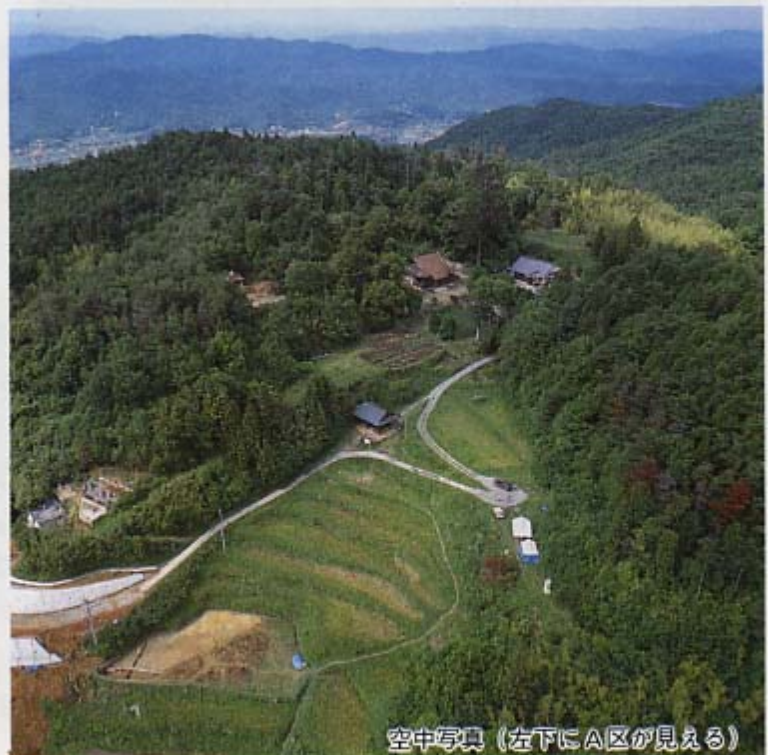
当時としては（現在も？）、高級品と言えるものばかりで、寺勢の盛んだった様子を伺わせてくれます。

建物跡の周辺で焼け焦げた陶磁器や多量の灰、建て替えられた様子が見つかったことから、火災によって1度は建物を失ったようです。

また、遺物の多くが炭化物層の中から出土しているので、火事の時に大切な陶磁器類も焼けてしまったのでしょう。

調査終了後に、市教育委員会が遺跡の広がりや遺構の性格を確認するための調査を行い、B区の続きに建物跡を見つけています。しかし、限られた調査面積であるために、全貌を明らかにすることはできません。

遺物や遺構図面の整理作業を進めていますので、その成果を今後の『阿岐のまほろば』で紹介できることでしょう。



空中写真（左下にA区が見える）



## 江戸時代の寺院跡

鴻の巣東1・2号遺跡（西条町下見）



鴻の巣東2号遺跡は、広島大学のすぐ北の低い丘陵上に、鴻の巣東1号遺跡は、その丘陵の東側下の平地に位置しています。

道路の建設に伴って、平成9年1月から6月まで併せて約2,000m<sup>2</sup>を発掘調査しました。

鴻の巣東2号遺跡は、寺院の裏側の北向きの斜面で、調査前は畑や山林となっていました。平成8年度の調査では多くの溝状遺構を検出していますが、平成9年度の調査では、30m四方の平坦面を設け、そこに掘立柱建物を建てた跡が見つかりました。

この丘陵上に仏堂があったという伝承があることから、寺院や、それに伴う住居の可能性があります。出土している遺物が中世から近代までであることや、おびただしい数の柱穴が検出されていることから、何度も建て替えを繰り返しながら、生

活を営んでいたことが分かります。

鴻の巣東1号遺跡は、調査前は水田、畑となっていました。調査の結果、土坑と溝状遺構を検出しました。出土した瓦や陶磁器などの遺物から、近世の住宅跡と考えられます。



鴻の巣東1・2号遺跡位置図(1:50,000)



## 出土遺物が語るもの

鴻の巣東1号遺跡（西条町下見）



陶磁器・瓦・砥石



木簡

鴻の巣東1号遺跡は、広島大学の北に伸びる尾根の先、北から東側に広がる中世末～近世にかけての遺跡です。土地区画整理に伴い、平成8年5月から8月まで約3,000㎡を発掘調査しました。（『阿岐のまほろば』Vol. 7参照のこと。）

水田の下から、井戸や石垣、池、溝、ゴミ穴などの遺構が検出され、多くの遺物が出土しました。

土器の鍋や羽釜・はんどうと呼ばれる甕、伊万里や唐津・明石の播鉢・備前の壺などの陶磁器や、瓦など、西日本の各地で生産された焼き物が出土しています。当時、これらの品々が商品として広く流通していたことを偲ばせ、活発な経済活動がうかがえます。

また、煙管、古銭などの金属製品や、下駄、木槌、樽の栓、板を組み合わせた蓋などの木製品も出土しています。木製品の中には、「餅中之式□」と墨書した木簡もあります。江戸時代の人々も餅を食べていたのでしょう。

これらの遺物の多くは、日常使用していて破損したか、不要となって捨てられたものですが、化学製品を除いて、現在の日用品とあまり変わりありません。私たちの日常の暮らしの原型が、すでに江戸時代には出来上がっていたことを、鴻の巣東1号遺跡の出土品は教えてくれます。

### ☆10号を迎えて

市内に眠る多くの文化財は、我々みんなの貴重な財産です。今後とも、日々姿を現しつつある文化財の情報をいち早くお届けしていきたいと思ひます。先人の足跡を辿り、歴史を垣間見ていただければ幸いです。

東広島市教育文化振興事業団 文化財センター報

### 阿岐のまほろば Vol. 10

発行日 平成9年8月29日

編集・発行 財団法人東広島市教育文化振興事業団 文化財センター  
東広島市西条町大字馬木541-1

TEL 0824-25-3880 〒739

印刷 今谷印刷株式会社